

アメリカの平和資料館と平和博物館を訪問して

山根 和代

(立命館大学国際平和ミュージアム副館長)

アメリカのペンシルバニア州のスワスモア大学平和アーカイヴ、オハイオ州のウィルミントン大学平和資料センター、そしてフィラデルフィアのEnvision Peace Museum事務局とデイトン国際平和博物館などを訪問する機会があった。平和に関連する施設の内容について報告する。

1. スワスモア大学ではピースアーカイヴをどう教育に生かしているのか？

2014年12月3日、4日に、伝統ある平和アーカイヴを運営し、平和研究を教学に結び付けた活用をしているスワスモア大学の平和研究と平和アーカイヴ(Peace Collection)を調査してきた。

スワスモア大学は1864年にクエーカー教徒によって設立され、創設者は奴隷制や南北戦争に反対であった。平和学をカリキュラムに入れたのは、スワスモア大学がアメリカで最初の大学かもしれないと言われている。現在の大学は非宗教的であるが、クエーカー教徒の伝統や価値観(平和主義)を見ることができる。

平和学・紛争解決学を受講する学生は、個人的な問題から国際的な問題まで様々な問題について考える機会を持つことができる。学際的なカリキュラムを通して暴力の原因や結果、また平和的で非暴力的な紛争解決、紛争転換について学ぶことができる。学生が学ぶことができる内容は、次の通りである。

1. 様々な問題の原因を、歴史的、社会的、経済的、政治的、文化的、心理的、生物学的、宗教的に理解する。
2. 個人間、集団間、国際的な問題など、特定の問題を分析する。
3. 平和構築と和解に関する理論や模範的事例について調べ、問題を非暴力的に解決しようとした試みを評価する。
4. 様々な形をした抑圧や不正について、また紛争

との関係について国際的レベル及び地方のレベルで調べる。

5. 平和と紛争に関する問題を、フィールドワーク、インターンシップ、また教室外での経験を通して研究する機会を持つ。

このプログラムはどの専攻の学生でも受講でき、副専攻とすることもできる。その場合「平和学入門」のクラスは、全員が受講しなければならないようになっている。通常フィールドワークやインターンシップで単位の取得はできないが、教員とのプロジェクトに取り組む場合は、1単位を取得できる。

海外での学術的プログラムは、これまでタンザニア、インド、エクアドル、メキシコ、北アイルランドで取り組まれている。

子どもたちが抱える問題を平和的に解決する取り組みには、奨学金が提供される。また世界で最大級の平和アーカイヴであるPeace Collectionで研究する学生には、研究奨励金が出るようになっている。

平和学のコースの代表は、Dr. Lee Smitheyであるが、注目すべきことはPeace Collection担当のDr. Wendy Chmielewskiが含まれていることである。

コースの内容について

学生は下記のクラス以外に、独自の研究をすることができ、またペンシルバニア大学や海外の大学での単位も認めることがある。

クラスとして、平和学・紛争解決学、平和学入門、安全保障と防衛：非暴力的戦略、人道的介入、テロに対する非暴力的対応、研究のインターンシップ・フィールドワーク、研究セミナー：戦略と非暴力的闘い、論文などがある。

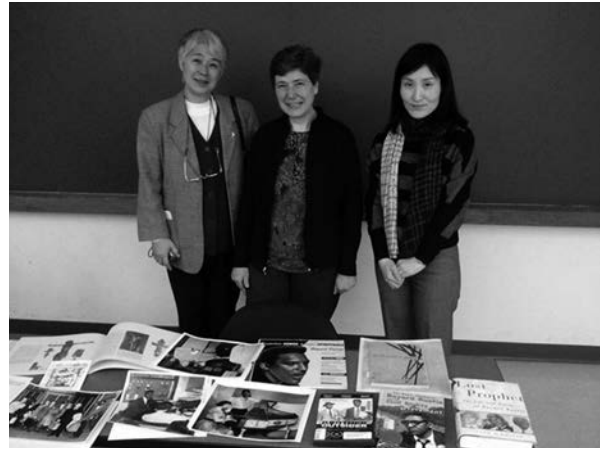
Peace & Conflict StudiesのクラスにおけるDr. Wendy Chmielewskiの講義について

Dr. Wendy Chmielewskiの名前はポーランド系で、父親のおじが日露戦争の際、兵役拒否をしてアメリカに渡ったという。当時ポーランドはロシアに支配されていたが、自由を求めて渡米したそうである。Peace & Conflict Studiesの授業が9時半からあり、Dr. Lee SmitheyのクラスでWendyさんが講義をされた。Peace Collectionにある本、映画、写真などの実物を見せて、アフリカ系アメリカ人であるBayard Rustinについて紹介された。彼は1912年にペンシルバニアで生まれ1987年に亡くなっているが、黒人市民権獲得運動や平和運動で活躍をした。インドのガンジーの非暴力主義に影響を受け、1963年ワシントンで雇用と自由を求める行進を組織する際に中心的な役割を果たした。しかし彼は同性愛者であるために1953年に逮捕され、公的な活動を控えるようになった。(アメリカのある州では、2003年まで同性愛者は犯罪者であると考えられていた。) Rustinはクエーカー教徒で第二次世界大戦中は兵役拒否をしたため、投獄された。冷戦中は核実験や朝鮮戦争に反対し、非暴力的平和的にソ連との対立を解決しようとした。そのため「アメリカのガンジー」と彼を呼ぶ人もいた。2013年にオバマ大統領は、Rustinに大統領自由勲章という最高位の勲章を授与した。このように歴史に埋もれたことを調査、研究する学会として平和歴史学会 (Peace History Society) があるが、今回の講義は知られざる黒人指導者で平和主義者に焦点を当てていた。

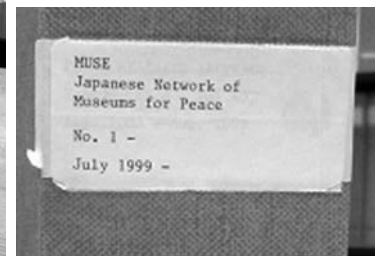
授業後平和学のクラスについてDr. Lee Smitheyと話す機会があった。シラバスを見せて下さったが、平和学の理論だけでなく学生に様々な実践をさせているのが興味深い。例えば平和活動をしている人に学生が話を聞いて、それをまとめている。世界の平和主義者についてまとめて、ウェブサイトで発信している。このウェブサイトの存在を知っていたので留学生に紹介



図書館にある Peace Collection



左から筆者、Peace CollectionのWendyさん、当館学芸員の兼清順子



平和のための博物館市民ネットワークの英文通信「Muse」も保存されていた。(「Muse」は、安齋育郎、山辺昌彦、筆者が編集)

してみた。スワスモア大学だけでなく世界各地の学生と協力していくと、より充実したウェブサイトを作ることができると思う。

その後Peace Collectionを訪問した。ノーベル平和賞を女性として初めて受賞したベルタ・フォン・ズットナー関連の資料が豊富であるのに驚いた。彼女の日記は、国際連盟図書館所蔵の複製を保存していた。

翌朝 (12月4日) フィラデルフィアにあるEnvision Peace Museumプロジェクトの事務局へ行って代表のTony Junkerさんたちに会った。これから平和博物館を創設する予定で準備をしている段階である。展示物として、普通の人が平和的に問題を解決している例を集めたものを作っている。今後交流をすることにしたが、残念ながらその後資金不足でこのプロジェクトを中止するという連絡があった。平和博物館の資金難は、どこでも共通している問題のようである。

2. ウィルミントン大学平和資料センター 40周年会議に参加して

アメリカのオハイオ州にウィルミントン大学があるが、この大学もクエーカー教徒によって創設された。ここには平和資料センター (Peace Resource Center) がある。このセンターは、冷戦の真ただ中の1975年にバーバラ・レイノルズ (Barbara Reynolds: 1915-1990) によって創設された。そこでは被爆者のメッセージを通して、核兵器の市民への影響と世界平和の必要性について知らせるために、被爆30年会議が開催された。その後平和資料センターは、大学や地域において被爆体験と世界の平和主義に関する歴史的資料を通して様々な取り組みをするだけでなく、色々な紛争解決に取り組んできた。2015年9月10日、11日に平和資料センター創設40周年記念会議が開催され、知識人や平和活動家が集まった。会議のテーマは、「正義と平和：地域社会と国際社会への使命」であった。

バーバラ・レイノルズは広島に世界友情センター (World Friendship Center) を創設し、海外や日本の人々が交流する場となっている。立命館大学では「国際平和交流セミナー」と「平和学セミナー」(留学生も受講し、著者が担当)の受講生が、毎年アメリカン大学の学生と広島・長崎へ行く際に、このセンターで被爆体験を学んでいる。2015年は「原爆の母」(Atomic Mom) という映画を見て、その監督と映画に出てくる被爆者の話を聞く機会があった。この映画では、1950年代に原爆開発の仕事に青春を賭けた一人の女性科学者を描いている。何十年も良心の呵責に苛まれた母の告白を記録する映画監督である娘と、自分が知らないうちに犯した罪の許しを請う母親に救いの手を差し伸べる広島被爆者が登場している。

私はこの会議で、「公共機関と地域社会の平和観」というテーマで、パネリストとして発言を求められ、日本における公立の平和博物館と私立の平和博物館、特に国際平和ミュージアムについて報告をした。その他のパネリストとして、デイトン平和博物館館長のジェリー・レグット氏と、クエーカー遺産センター代表のルース・ブリンドル氏が発言された。デイトン平和博物館にはその後訪問する機会があり、主に平和の実現のために努力している人々の展示がされていた。ガンジーのように国際的に有名な人だけでなく、地域社会で平和の実現のために活動している人々の展示、また環境問題を子どもや市民が身近に考えることができるような展示があった。またウィルミントン大学のキ

ャンパスにあるクエーカー遺産センターも訪問することができた。1927年には日米友好のために人形の交換をし、ウィルミントン大学から長崎の学校へ人形を送ったそうである。センターには、ひな人形が飾られていた。2012年にはウィルミントン大学から学生を広島へ送り、その訪問に基づいて展示を行ったそうである。

基調講演はシカゴ大学名誉教授のノーマ・フィールド氏の「正義のない平和はあり得ない」という内容であった。ちょうど派遣労働者に関する法案(改正労働者派遣法)が国会で通されたが、貧困問題が存在していれば平和と言うことはできない。また福島原発の問題が解決されておらず、正義が存在していないので平和ということとはできないという指摘であった。ではどのようにして地域社会や世界で平和の実現をするのかという問題について、いろいろなセッションで報告があり、討論された。核兵器の問題では平和資料センター所長のターニャ・マウス博士がセンターの案内をしながら、バーバラ・レイノルズの平和活動について紹介された。1950年代アメリカの太平洋における核実験



レイノルズ一家の反核平和ヨットの旅

をする中、一家でヨットに乗って反対の意思表示をした。バーバラ・レイノルズは広島の実験者の声に耳を傾け、ハンガーストライキも行ったがその時の写真が展示されていた。

ニューヨーク大学のジョイス・アップセル教授が、国際平和ミュージアムの展示で日本の戦争の被害だけで



反核平和ヨットの旅に参加したジェシカさん

はなく、加害の展示も行われていることに感銘を受けたこと、2016年に出版する著書で国際平和ミュージアムを紹介するというお話もあり、大変励まされた。平和資料センターでは、単に平和研究をするだけではなく、平和教育を地域社会で行っていること、また海外（ケニアや南スーダンなど）で貧困問題に取り組んでいるクロスカレント国際研究所（Crosscurrents International Institute）の実践も、大変印象的であった。



Peace Resource Center at Wilmington College

スワスモアカレッジ ピースコレクションについて

兼清 順子

(立命館大学国際平和ミュージアム学芸員)

1. 訪問の目的

2014年12月、アメリカ・フィラデルフィア州にある Swarthmore College Peace Collection を訪問した。訪問の目的は、見学や聞き取りを通して（1）ピース・コレクションの設立の理念やこれまでの歴史、現在の運営状況や果たしている役割について明らかにする、（2）同学の教育（平和学専攻）の中でのピース・コレクションの活用について調査することである。訪問期間2日の間に、バックヤードを含めたコレクションの施設見学、コレクションの利用申請から閲覧の体験、学芸員からコレクションの概要をはじめ運営に関する聞き取り、平和学専攻においてコレクションを活用した授業の見学をすることができた。聞き取り調査では、Wendy Chmielewski氏（ピース・コレクション学芸員、平和学専攻プログラム委員）、Lee Smithey氏（社会学准教授、平和学専攻プログラム代表）にお話を伺

い、細かい質問まで丁寧に回答をいただき、大変お世話になった。

2. スワスモア・カレッジ ピース・コレクション (Swarthmore College Peace Collection) について

スワスモア・カレッジ・ピースコレクションは、ペンシルバニア州フィラデルフィア近郊にあるスワスモア・カレッジにおいて1930年ごろに成立した平和運動関連の資料を収集する文書館である。

スワスモア・カレッジは、1864年にキリスト教の一派であるクエーカー教徒の教育とリーダー養成を目的に設立された私立大学で、当初はクエーカー教徒のための小規模な大学であった。20世紀初頭にいち早く男女共学制をとるなどして大学として躍進し、規模を拡大した。現在、在学生は1600人程度、教養系カレッジにはまれな理系専攻もあり、これまでに卒業生から5

人のノーベル賞受賞者を輩出している。少人数セミナー制の授業を中心に、科学、工学、人文科学、社会科学の分野に600以上の専攻があり、平和学の専攻も設置されている。学術以外にも、体育系種目での活躍や、学生のアクティビズム（イラク戦争時には学生主体のWar News Radioが活動したなど）でも評価を受け、さらに、フィラデルフィア中心部から電車で25分程度の郊外に位置する425エーカーのキャンパスは、全米で最も美しいキャンパスに選ばれたこともある、トップエリート校である。

無宗教となった現在もクエーカー教の精神により始まった平和主義の学究の伝統と蓄積は厚い。現在も元クエーカー系の私立3大学コンソーシアム（他にプリンマーカレッジ、ハバーフォードカレッジ）による図書館や授業の連携も強固である。そして、世界でも屈指の平和運動関連文書館として知られるピース・コレクションも、この伝統の上に成立したものである。

コレクションが成立した1930年頃は、第一次世界大戦後の世界的に平和主義への関心が高まった時期であり、当時の学長は国際主義や平和主義に関する資料の収集に力を注いだ。そこへ1931年にノーベル平和賞を受賞したジェーン・アダムスが蔵書を寄贈、その後アダムスが設立したInternational League For Women For Peaceの文書も収蔵されることとなり、更にアダムスの蔵書寄贈を受けた4年後の1935年頃に大学がコレクションの最初の学芸員エレン・スター・ブントンを雇用し、ジェーン・アダムス文書の全面的な受け入れ作業が進められた。また、1938年にはブントンの19世紀以降のヨーロッパの平和運動関係資料収集旅行が行われ、コレクションの充実が図られた。その後、ヨーロッパにファシズムが台頭し、平和運動関連資料の多くが戦災で失われたため、ここで収集された資料は貴重なものとなった。

現在の館のミッションは「市民と国家間の非暴力的社会変革、武装解除、紛争解決を目指す、非政府による努力を記録した資料を収集、保存、公開すること」(HPより)であるが、学芸員によれば1970年代までは環境関連の運動団体まで幅広く資料収集対象としていた。しかし、収蔵量の限界に直面し平和運動に特化することとなった（例えば「人権」に活動を集中するアムネスティ・インターナショナルの資料は受け入れていない）。また、1980年代以降は平和運動の中でも「和解」や「武装解除」に関する活動の重要性が上昇し、こうした運動団体の資料は積極的に受け入れることになった。このような流れの中、草の根の非政府の運動

で、かつ平和運動の団体の資料収集に限定する現在の方針ができたと言う。

現在では、コレクションは1815年から今日までのアメリカと世界における平和運動の拡大を反映するものとなり、平和主義、女性と平和、良心的兵役忌避、非暴力主義、市民的不服従、ベトナム戦争反戦運動、アフリカ系アメリカ人の抗議と公民権運動、フェミニズム、市民的自由、社会保障の歴史、に関する貴重な資料群を収蔵し、とりわけアメリカの平和運動における女性の主導的な役割と、公的空間における活動の記録に強いコレクションとなっている。

3. ピース・コレクションの運営について

(1) 資料収集方針

20世紀を通じて、戦争と平和の構造や概念は大きく変化し、平和運動が必要とされ発展する場所も変化してきた。前述のように文書館の資料収集方針もこの変化の洗礼を受けて変遷してきた。

同学芸員によれば、「『平和の概念の拡大』に伴い、収集方針を『広く社会正義の課題に関する資料』へ拡大するのが理想だが、収蔵空間の限界でできない。平和に関する問題や政策の変化により、平和運動を行う組織や運動のテーマも変遷するため、収集に当たっては、今後の関心の先読みが求められる」とのことであり、時代ごとにその時期や状況に応じ現実的な収集方針が設定されて来たことがわかった。

(2) 資料受入判断

原則として、資料は寄贈によるものであり、受け入れが決まっている団体の文書は定期的に寄贈される。こうした資料群や、また個別の資料（図書等が多い）の受け入れ可否は、学芸員が判断しており、検討の際に特に以下の3点が重視されている。

- ①収集方針との合致
- ②米国内の他の文書館や図書館が収蔵する類似分野のコレクションとの関係性
- ③資料としての価値の高さ

米国内の他の文書館や図書館のコレクションとしては、戦争関連の文書を多数収蔵するスタンフォード大学図書館フーパーアーカイブ、労働運動関連の文書の多いニューヨーク大学図書館、アメリカ公文書館について文書の収蔵が多いウィスコンシン歴史協会、女性史研究で著名なハーバード大学ラドクリフ研究所附属シュレシンジャー図書館とスミスカレッジ（ソフィ

ア・スミスコレクションなど)を常に念頭におき、資料がそれら機関のコレクションに入るほうがよりふさわしい場合は、連絡を取り合い、互いに受け入れに関する相談をしている。

自身の管轄するコレクションを越え、その資料がどこでどのように保全されることが最も有効であるかを互いに意識しあつての協力体制は、目先のステータスや評判にとらわれずに館のミッションを社会全体の中で果たすことを視野に入れた見識であると同時に、各館に限界がある中で資料の散逸を防ぐための現実的な対応である。

(3) 資料受入手続

資料の登録、整理は、1点づつ管理するミュージアム式と異なり、文書をファイル単位で管理(ファイル内は整理せずそのまま)し、ファイルを中性紙のアーカイバルボックスに収納し、ボックスを書棚に立てて保存している。ファイル名のデータベースがあり、閲覧は、ボックス単位もしくはファイル単位で応じている。コレクションにはバッジやTシャツ、また日本の幻燈スライドなども収蔵されているが、収蔵資料の大半は、書籍、書誌、もしくは文書である。しかし、昨今は各団体が産出する情報量が増え、資料の整理完了が難しいため、完全な目録化ができなくても点検、整頓し、まずは登録して利用可能な状態とすることを重視しているという。

個人情報を含む文書の受け入れの際は、寄贈者と話し合い、できる限り利用者が自由に閲覧や引用できる条件での受け入れを進めているが、個人情報のコピーや引用を禁止する資料もある。また、近年は、デジタルデータの収蔵をはじめ、ホームページのデータ(特定のデータおよびプリントアウト)を文書として受け入れている。

(4) 資料管理

コレクションは、図書館の地下1階の一角にある。室に入ると入口付近に閲覧机や司書の机があり、正面に学芸員の机、窓側に資料整理などを行う作業机がおかれている。そして部屋の奥へ向かって開架の資料収納棚が並ぶ。資料収納棚のエリアは奥へ進むと金網で施錠された空間となり、収蔵空間は地下2階にもつながっている。しかし、資料は館内で収まらないため、マイクロフィルム撮影が済んだものはペンシルバニア大学の収蔵庫に送られて保管されている。なお、コレクション内の収蔵空間には空調はあるが、温湿度の自

動管理は行われていない。

データベースは大学コンソーシアムにより維持運営されているが、登録はコレクション職員が行っている。ホームページはコレクションが図書館の下で管理運営している。

(5) 利用対応

現在、コレクションの来館閲覧者は年間300~400名である。記帳の際にノート式の来館名簿を確認したところ、2014年11月の訪問利用は33名であった。日本からの調査者も1名あった。

資料の利用方法は、①訪問、②閲覧申請書記入、③ボックスを受け取り閲覧、の流れである。

職員からボックスを受け取り、閲覧机でこれを手にする。希望者は資料自体に条件が無い限り撮影を許され、また、申請すれば(コピー機が室外にあるため)室外に持ち出してコピー機で複写をすることも許されている(ホチキスは職員が外す。持ち出しは1点ごとに記録点検)。また、このほかに、年間に1200件ほどの資料問い合わせに対応している。また、施設間の取り寄せにも応じている。

(6) 人員体制

職員は4名。学芸員がコレクション全体を統括し、資料の受け入れ判断、調査研究、平和学講座の担当などを行っている。その下で司書が書籍や書誌の受け入れや登録、閲覧対応、アーキビストが文書の登録管理を行っている。また、事務職員が1名と学生アルバイト(資料出納から雑務全般)が複数名いる。職員の賃金や維持管理経費は大学が拠出しているが、予算面や事業計画面でほぼ独立的な立場にある。しかし、特別なプログラム(例えば、記念展示など)を行うために予算を確保したい場合は大学に頼ることはできず、ファンドレイジングや補助金への応募が必要となるが、ファンドレイジング担当がいらないため、現在は大きな資金開拓はできない状態である。

(7) 活用促進

聞き取り調査の中で、学芸員にコレクションの活用促進のためにどのような取り組みをしているか伺ったところ、コレクションへの「アクセスポイント」を増やすことが重要であり、そのための具体的取り組みとして6点挙げられた。

- ①詳細なファイルのリスト作成
- ②検索の補助情報の提供

- ③ウェブ展示
- ④複数機関のウェブサイトから検索可能とする
- ⑤論文執筆
- ⑥他機関への貸し出し

であった。

言いかえれば①、②、④は、収蔵資料に関する情報の整備、③、④はインターネット上でのアクセス数を上げること、③、⑥は、資料そのものを何らかの形で見てもらう機会を増やすこと、⑤は、館発信の研究があることの重要性の指摘であった。

また、研究促進の取り組みとしては、

- ①収蔵資料を利用したり引用がある研究文献のリストをホームページ上に公開
- ②資料の利用傾向の分析
- ③他の利用者の利用履歴の公開（本人に承認を得た場合のみ）

などを行っており、このコレクションでしか得ることができない平和研究に関する研究動向の情報収集に力を入れていることがわかる。部屋の入り口にはコレクションを利用した図書の紹介コーナーが設けられている。

こうして把握される近年の閲覧傾向としては、良心的兵役拒否関連、女性の平和運動（特にベトナム戦争時）、ナイジェリア戦争に関する資料の利用が増加し、戦間期の資料の利用が減少しているとのことであった。

4. 教学面での活用に向けて

スワスモア・カレッジには、平和学専攻プログラムもあり、各分野の科目を組み合わせることで学位をとることができる。プログラムの指導委員会は、社会学、心理学、文学、哲学、ピース・コレクションから1名ずつ担当が出て構成されている。平和学専攻は、この大学の建学の精神である平和主義の伝統に則したものだが、コレクションの存在はこのプログラムにどのように役立っているのだろうか。

訪問の際にコレクションを使った平和学の授業を1コマ見学した。詳しくは前稿（山根）で紹介されているが、教室にアーカイバルボックスごと持ち込み、平和運動家の活動を紹介しながら、当時の資料を手品のようにボックスから取り出して見せ、机の上に資料が並べられていく様に学生たちの関心が集まっていた。このような講義はセメスターで1回行われている。

聞取りの中で、この専攻の代表者であるスミセイ氏

は、コレクションがもたらすメリットとして、以下を指摘した。

- ①学生が調査に利用できる
- ②平和学関係の研究者が調査のためにキャンパスを訪れることで、学术交流の機会や議論の活発化に貢献する
- ③著名なコレクションを所有することは、国際的なステータスの向上に役立つ
- ④授業での見学に利用できる（実物は学生に刺激を与える）

では、平和学専攻プログラムはコレクションの利用促進に役立っているのか。学芸員の回答は、「どちらともいえない」であった。前述の授業では、アーカイブからの出前式講義のほかに授業での来館もあり、学生へのコレクションの周知の機会にはなっているが、平和学副専攻は、「歴史学」領域ではないため、コレクションの売りである「歴史文書」を利用した研究を目指す学生が平和学副専攻には少なく、利用数の増加には結びつきにくいとのことであり、学術上のディシプリンとコレクションの相性が有機的な関係に大きく左右していることが浮き彫りになった。

5. 訪問を終えて

ピース・コレクションは、第一次世界大戦後の平和主義の中から誕生し、ジェーン・アダムス文書など目玉となる資料の受け入れによって成立した。これは現在でもコレクションのお宝だが、このコレクションの秀逸性はお宝に頼ったものではない。今回の訪問でふたつの特長が感じられた。

ひとつは、80年以上に渡り収集・整理されてきた資料群の厚みとそれによって派生する研究上の価値である。閲覧の傾向から研究動向が見えるほどの資料数は、どこにでもあるものではないが、コレクションではこれを意識的に収集し、可能な範囲で他の研究者の役に立つよう整備し、コレクションの利用により生み出される研究トレンドを発信することに力を入れている。このような研究アーカイブとしての意識の高さは、形式の整った資料整理よりも公開を優先、内部記録の電子化やホームページの体裁など内実に直結しない細事を最小限にそぎ落とすといった、日常的な運営における優先順位を伴った実践に裏打ちされている。事実、コレクションを利用した新刊の紹介は、室内でもネット上でも行っている。

ふたつめは、世界全体の中でアーカイブの使命を果

たすことを前提とした姿勢である。類似資料を収蔵する全米の各コレクションを見渡し、その中でいかに資料を残していくか見定める姿勢は、その館の「お宝」として客寄せに利する資料群や、即時的に活用できる資料だけ受け入れるような風潮とは対照的である。しかし今後、日本で平和関連文書を残していくためには



コレクションの入口からの風景

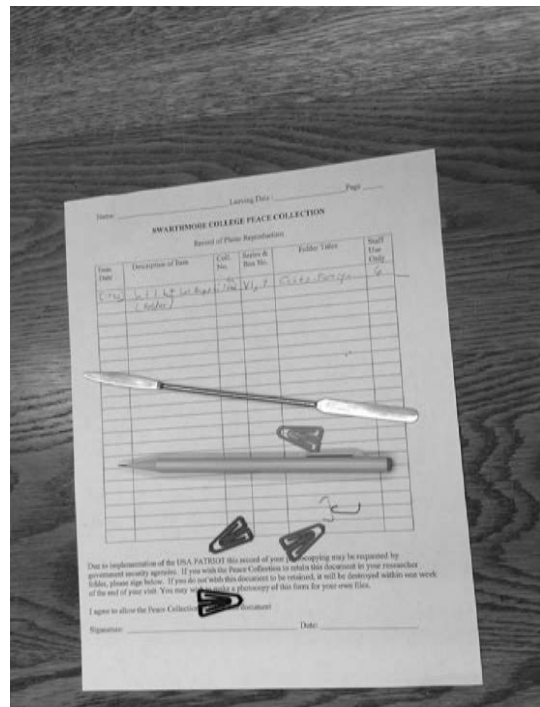


奥まで続く収蔵棚

関係団体がこうした視点に立った運営をすることが不可欠だろう。

*U.S. News Liberal Arts Collegeランキング
<http://colleges.usnews.rankingsandreviews.com/best-colleges/rankings/national-liberal-arts-colleges>)

*Jane Adams (1860-1935)：ソーシャルワーカーの先駆者。セツルメントなどの社会福祉事業、平和運動、女性運動で知られ、1931年ノーベル平和賞受賞。卒業生ではないが、当時の学長と懇意であった。))



コピーのための申請用紙とホッチキスを外す道具



文書の入ったアーカイバルボックス